

2020年5月31日 大井バプテスト教会 礼拝説教

説教題「ペンテコステの祈り」コロサイの信徒への手紙2章6～7節

主任牧師 加藤 誠

(私訳)「あなたがたは、主キリスト・イエスを受け取ったのですから、キリストのうちに歩みなさい。キリストのうちに根を下ろし、キリストのうちに建て上げられなさい。習い覚えた信仰にしっかり建てられ、あふれるばかりに感謝して。」(コロサイ2・6～7)

「キリストのうちに歩み、キリストのうちに根を下ろし、キリストのうちに建て上げられなさい」。ここで使徒パウロは「キリストのうちに (in Christ)」という言葉を大切に使って、「歩み、根を下ろし、建て上げられなさい」と励ましています。

その理由は「あなたがたは、主キリスト・イエスを受け取ったのだから」と。神は私たち一人ひとりにキリストを与えてくださり、あなたがたはそのキリストを確かに「受け取ったのだから！」とパウロは言うのです。

また、この文章の直後でパウロはこんな言い方もしています。「あなたがたは、キリストの割礼を受け、バプテスマによって、キリストと共に葬られ。キリストと共に復活させられたのだ」(11節以下)。

「割礼」とは、ユダヤ教徒たちが「これこそが、我らが神の民であるくしるし>だ！」と誇った男性の性器に「傷」をつける儀式のことを言います。「俺は異教徒とは違う。俺には割礼がある！」と、ユダヤ教徒たちが「よりどころ」とし、「誇り」とした傷です。しかし、いまやその「割礼」に代わり、あなたがたは、キリストと共に葬られ、キリストと共に復活させられる「バプテスマ」によって、あなたがたに「キリストの恵み」の「しるし」が刻まれたのだ…と、パウロは言うのです。

人は、どのようにしてクリスチャンになるのでしょうか。

お祈りしたら、クリスチャンになるのでしょうか。礼拝に出席して、献金したら、クリスチャンになるのでしょうか。あるいは、隣人を愛する行いをしたら、クリスチャンになるのでしょうか。

いいえ。違います。イエス・キリストの恵みを刻み付けられて、クリスチャンになるのです。そのキリストの恵みという傷は、一度刻まれたら、決して消えません。私たちが神と結びつけ続けてくれる恵みの傷です。ただし、その傷は人々の前で「割礼」のように誇れるものではありません。なぜなら、「お恥ずかしながら、こんなわたしがクリスチャンにさせていただいているのです」と告白せざるをえない傷だからです。「神を愛することにおいても、隣人を愛することにおいても貧しく、情けない者を、それでも愛してくださるキリストの恵み。罪の中に死んだ者を生かしてくださるキリストの恵みによって、わたしはクリスチャンにさせていただいているのです…」。これがクリスチャンの告白だからです。

ですから、クリスチャンはキリストから離れては歩めません。「キリストのうちに歩みなさい。キリストのうちに根ざし、キリストのうちに建て上げられなさい」。キリストから離れ、キリストの恵みという土台から外れて、クリスチャンは生きるこ

とができません。「キリストのうちに」、キリストの恵みにすっぽりと包まれて歩む。キリストが教えてくださった価値観。何が第一で、何が第二のことがらか。キリストが教えてくださった信仰と希望と愛と、この世の力や地位や富と。厳しいことですが、私たちが第一にするものを間違えてしまうなら、私たちはクリスチャンとしては歩めないのです。

先日、教会員のAさんがお嬢さんに車椅子を押してもらいながら教会を訪ねてくださいました。Aさんは今年初めに入院されて身体的にかなり弱られたにもかかわらず、病床で「教会の礼拝に行きたい」旨をくり返しご家族に話しておられたようで、お元気に回復されて退院された今、お嬢さんがパソコンをテレビにつないで礼拝の録画配信を一緒に見ておられるとのことでした。

「教会の礼拝に行きたい」。キリストにつながっていたい。キリストの恵みから離れたら、自分を生きることができない。ご高齢で認知的にも厳しい状況にありながら、切に神さまとのつながりを求めるAさんを通して、ご家族が動かされていったのだろうか…と想像します。コロナ禍のためにやむなく始まった礼拝録画の配信ですが、このような形でAさんのご家族と教会をつなげることに用いられていると知り、ほんとうにうれしく思いました。

誰もが想像できなかった今回のコロナ禍の中で迎えるペンテコステに、私たちはどのような祈りを神にささげるのでしょうか。

二千年前、部屋の中に閉じこもり、神に祈ることしかできなかった小さな者たち。部屋の外には、イエスへの反感に満ちた人びとがあふれていました。何を語ったところで「たわごと」と片付けられ、下手すると暴力的制裁を受けるかもしれない恐怖を、弟子たちはひしひしと感じていたことでしょう。彼らは、学識もなく、社会的地位もなく、富もない。社会的に何のパワーも行使しえない小さな者たちでした。しかし不思議なことに、その小さな者たちがイエス・キリストの福音宣教に立ち上がらされていった！！これがペンテコステに起こった不思議です。ありえないことです。ガリラヤ地方出身の弟子たちは、エルサレムの都では田舎者として見下げられていました。ペンテコステに、漁師のペトロが人々の前で力強く説教し始めた時、「こいつらは、無学なただの人ではないか」と周囲は驚き怪しんだと言います。しかし、人間の知恵の力ではなく、神の聖霊の息吹が注がれるところで、ペンテコステの不思議は起こされ、教会は誕生したのです。

今、私たちはこのコロナ禍で新礼拝堂建築をどのように考えるべきか、深い迷いと不安の中に歩んでいます。経済的にはどう考えてもマイナス要素が増えています。自分たちの目の前の課題をしっかりと冷静に見る理性は大切です。しかし計算では新礼拝堂は建ちません。「あなたはどのような信仰をもって、この礼拝堂をささげているのか」。「キリストのうちに歩み、根を下ろし、建て上げられる信仰とはどのような信仰だろうか」。私たちの信仰的未熟さをえぐり出され、砕かれる中にただ聖霊が働いてくださること。今のプロセスがキリストにさらに根を下ろし、教会として深く建てあげられていく歩みとなるよう祈っていきたいのです。